

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：34315
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2012～2015
 課題番号：24730156
 研究課題名(和文)「ポスト・ネオリベラリズム」時代の金融秩序のあり方—日米英の金融制度の比較研究

 研究課題名(英文)Financial Orders in a "Post-Neoliberal" Era: A Comparative Study

 研究代表者
 安高 啓朗 (Ataka, Hiroaki)

 立命館大学・国際関係学部・准教授

 研究者番号：90611111

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、金融危機後のグローバル金融秩序のあり方について、カール・ポランニーの「埋め込み」概念を一つの手がかりに、グローバル金融が社会に埋め込まれるうえでの制度の特性と多様性を検討した。ここでは、経済が社会に「埋め込まれた」秩序と「離床した」秩序という二項対立的な見方は生産的ではなく、むしろ経済が社会に埋め込まれている多様なあり方に注目すべきであること、またその際、経済と社会を結ぶ多様な「制度的配置」を分析すべきであることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：This research examines the nature of the global financial order after the financial crisis of 2008-9, drawing on Karl Polanyi's concept of "embeddedness," and focusing on the institutional nature and diversity in which global finance is embedded in society. It suggests that a dichotomous view between an economy fully embedded in society and a disembedded one is not productive, and should thus focus on the various ways in which the economy is embedded in society, and that one should analyze the various "institutional arrangements" when doing so.

研究分野：国際関係論、国際政治経済学

キーワード：グローバル金融秩序 ネオリベラリズム ポスト・ネオリベラリズム 世界金融危機 権力/知 行為
 遂行性 埋め込み 政策レジーム

1. 研究開始当初の背景

2008年9月のリーマン・ブラザーズ破綻によって本格化した世界金融危機は大恐慌に匹敵する脅威として捉えられ、金融システムの安定化のために、かつてない規模の公的資金の注入が決定されるなど、国際政治経済秩序を揺るがしかねない危機として捉えられていた。また、つづくユーロ危機では、金融を含めた経済活動のグローバル化の帰結として各国の債務が著しく増大しており、債務危機が頻発しかねない状況が明らかになったのである。したがって、過度の金融活動を抑制し、金融システムを安定化するためのグローバルな規制レジームのあり方を検討することが喫緊の課題として共有されていた。そうした歴史の転換点という時代認識は、1970年代以降の支配的言説であるネオリベリズムの再考をも促すこととなったのである。カール・ポランニーの「自己調整的市場」に対する強力な批判と、そのアンチ・テーゼとしての「社会に埋め込まれた」秩序はこのような文脈で改めて脚光を浴びることとなった。この「ポスト」ネオリベリズム時代における言説・原理とそれにもとづいた制度構想を検討することが本研究の動機となった。

2. 研究の目的

以上のような問題意識を背景に、本研究の申請時に三つの研究目的を掲げた。

(1) 第一に、「埋め込み (embeddedness)」概念の批判的検討と、国際政治経済学におけるグローバル金融研究への位置づけを明らかにすることである。これは、ポランニーや、彼の思想に影響を受けた研究のいうところの「社会に埋め込まれた」秩序を、グローバル金融を分析する概念として再構築することにつながる。

(2) 第二に、金融が社会に埋め込まれている「程度」を理論化し、「政策レジーム」という形で理念型を提示することである。第一の目的を踏まえて、「社会に埋め込まれた」秩序の多様性を制度的配置に注目したうえで、「政策レジーム」として具体化する。

(3) そして第三の目的として、一次資料を活用した日米英の金融制度についての実証研究を通じて、理念型の検証を行うことである。

これらの研究目的を通じて、世界金融危機やユーロ危機によって生じた混乱の後に立ち現れる(であろう)規制レジームのあり方や、それを支える思想(「ポスト」ネオリベリズム)を捉える概念枠組みを導出することを目指した。

3. 研究の方法

本研究は、世界金融危機後におけるグローバル金融秩序のあり方について、カール・ポランニーの「埋め込み」概念を一つの手がかりに、グローバル金融が社会に埋め込まれるうえでの制度の特性と多様性について明らかにすることを目標としている。

(1) そこで、まず、「埋め込み」概念をグローバル金融の分析枠組みとして再構築するとともに、金融秩序の「埋め込み」に関する理念型である「政策レジーム」の理論的枠組の発展・深化を目指して研究を行った。ポランニーの思想についても研究が進んでいるが(Dale 2010; 若森 2011, 2015)、ここではポランニーにインスパイアされた経済社会学におけるF.ブロックやG.クリプナーなどの研究を参照しつつ、経済と社会の多様な関係性についての分析を進めた(Block 2007; Block & Evans 2005; Block & Somers 2014; Krippner 2001; Krippner & Alvarez 2007)。この際、国際政治経済学ではあまり参照されることのない経済人類学や社会理論についても目配せをしている(Hann & Hart 2009)。本研究の理論的な貢献は、専ら経済が「埋め込まれる」べき「場」に注目してきた「埋め込み」の研究(例えば、Harvey et.al. 2007などを参照)の視点を、経済と社会を結ぶ多様な「制度的配置」にずらすことである。

(2) 「政策レジーム」の抽出にあたっては、資本主義の多様性をめぐる議論を参考とした。資本主義の「幅」、あるいは「型」については諸説あるものの、有力な見方は資本主義における二つの極からなる理念型である(Hall & Soskice 2001)。一方の極には通常米国と英国とが括られる「自由市場型」モデルがあり、このカテゴリーに含まれる国々の市場は「自己調整的に」運営され、外的な介入は最小限に抑えられている。もう一方の極はドイツから日本に至る幅広い国々が括られる、非市場的な制度によって経済が統制されるモデルであり、ここでは社会的・政治的諸制度が経済活動により直接的な影響を及ぼすと考えられている。本研究においては、この二つの極(英米と日本)を両極として、金融制度の多様な特徴の特定を目指した。

(3) また、理論研究において得られた多様な「埋め込み」のあり方についての理念型をもとに実証研究を行う予定であったが、後述するように研究の射程を変更することを余儀なくされたため、実証の部分については着手できなかった。

4. 研究成果

(1) まず、「埋め込み」概念の批判的検討と、国際政治経済学におけるグローバル金融研究への位置づけについては、経済社会学の知見を参考にしつつ研究を進めた。近年の研究は「埋め込み」概念の二つの読み方を提起す

る。第一のアプローチは経済が「社会に埋め込まれた」秩序と、経済が「社会から離床した」秩序という二項対立的な読み方を行う（Beckert 2009; Gemici 2008）。ここでは埋め込まれた、前近代的な経済と自己調整的で社会から離床した現代の経済とに厳密に区分けされる。第二の、より新しい読み方はこのような区分を否定し、専ら市場社会の下で経済が社会に埋め込まれている多様なあり方に注目する（Block 2003; Block & Somers 2014）。全ての経済は埋め込まれているのであり、ある経済秩序の性質を理解するには経済が社会に埋め込まれている個別のパターンや制度的配置が重要となる。

従来の研究では第一のアプローチをとる見方が多く、そのことが（不完全ながらも）「社会に埋め込まれた」戦後の通貨・金融秩序を規定したブレトン・ウッズ体制と「社会から離床した」ネオリベラル体制という二項対立的な理解につながっていた。したがって、金融を社会に「再び埋め込む（re-embed）」ためには越境的な金融活動を規制し、強い国際機関を通じてグローバル金融に対する民主的コントロールを制度化することが持続可能な未来への唯一の道筋であると考えられていたのである。実際、こうした発想の延長線上に、例えば金融安定理事会（Financial Stability Board）の創設を位置づけることはできるだろう。しかしながら、このような見方ではネオリベリズムや世界金融危機に対する各国の異なる反応や状況を捉えきれず、またグローバル金融のあり方を変えていくには極めてラディカルな改革しか提起できなくなってしまう。そのため、「埋め込み」概念の第二の読みの方が世界金融危機後のグローバル金融秩序のあり方について考えるうえで有用であることを指摘した。

（2）つぎに、金融が社会に埋め込まれている「程度」を理論化し、「政策レジーム」という形で理念型を提示する作業については、当初の想定では資本主義の多様性をめぐる議論をてがかりに、経済が社会に埋め込まれている特徴的なパターンや制度的配置を抽出したうえで、金融を位置づける構想であった。しかしながら、研究を進めると多様性よりもむしろ共通性の方が明らかになってきたのである。これは、例えばユーロ危機において、非市場的な制度によって経済が統制されるモデルが強いと考えられる大陸欧州で緊縮財政政策（austerity）が強硬に進められたことを見ても明らかである（Blyth 2013; もっとも Konings 2016 も参照）。

（3）さらに、「埋め込み」や「政策レジーム」の形成について考察するために、歴史的文脈についても検討を行った。例えば、制度的配置としての「埋め込み」概念を精緻化するために、国別の多様性と密接に関係している、

国際社会を成り立たせている制度枠組みである「一次的制度」としての市場について検討した（Buzan 2004）。市場の史的形成について、その規則、制度や文化的基礎を明らかにすることは、経済がどのような「場」に埋め込まれるのかを考えていくうえで重要であると考えられるためである。また、市場社会の下で経済が社会に埋め込まれている多様なあり方を検討するにあたって、華夷秩序や朝貢貿易体制などを国際関係理論に包摂しようとする最近の試みを参照しながら、国際政治経済学における国家と市場という前提の批判的検討も行った。

（4）しかしながら、研究の進展と同時に次第に明らかになったのは、ポスト・ネオリベリズム時代の到来よりも、むしろ世界金融危機を経てもなお強固に維持されつづけているネオリベリズムの生命力の強さであり、オルタナティブな構想の貧困である。折しも、2013-2014年頃からネオリベリズム研究のいわば新潮流が見られるが、こうした研究に通底するのは「2008年の世界金融危機は大恐慌とも比較されるほどの重大な転換点ともくされていたにもかかわらず、その一因とされるネオリベリズムが未だに強い影響力をもつのはなぜか」という疑問である（例えば、Mirowski 2013、Schmidt and Thatcher 2013、Davies 2014などを参照）。実際、世界金融危機を嚆矢として20カ国・地域（G20）首脳会合の開催や、金融安定理事会（FSB、Financial Stability Board）の創設などによって金融セクターに対する規制は強められたものの、こうした動きはそれまでの政策の大幅な転換やネオリベリズムの否定にはつながっていない。したがって、研究開始当初に予期していなかったこれら事象に応じて、研究の焦点を改めてネオリベリズムの持続性に据えるとともに、国内外におけるネオリベリズム研究の一端を担うべく、研究をさらに進めている。

（5）このように、今後の展望としては、本研究のこれまでの成果を踏まえたくて、1)2008年の世界金融危機以後もネオリベリズムが支配的言説・論理でありつづけているのはなぜか、また、2)国際政治経済学（とくに主流派）がこうした状況において果たしている役割はなにか、の二点について、権力/知の観点からさらなる検討を行っている。こうした成果の一部は日本政治学会編『年報政治学』2017年度第1号（特集「世界経済の変動と政治秩序（仮）」）で発表する予定である。

<引用文献>

Beckert, Jens. 2009. "The Great Transformation of Embeddedness: Karl Polanyi and the New Economic Sociology." In *Market and Society: The*

Great Transformation Today, edited by Chris Hann and Keith Hart, 38-55. Cambridge: Cambridge University Press.

Block, Fred. 2003. "Karl Polanyi and the Writing of *The Great Transformation*." *Theory and Society* 32 (3): 275-306.

Block, Fred. 2007. "Understanding the Diverging Trajectories of the United States and Western Europe: A Neo-Polanyian Analysis." *Politics & Society* 35 (1): 3-33.

Block, Fred, and Peter Evans. 2005. "The State and the Economy." In *The Handbook of Economic Sociology*, edited by Neil J Smelser and Richard Swedberg, 2nd ed., 505-26. Princeton: Princeton University Press.

Block, Fred, and Margaret R. Somers. 2014. *The Power of Market Fundamentalism: Karl Polanyi's Critique*. Cambridge: Harvard University Press.

Blyth, Mark. 2013. *Austerity: The History of a Dangerous Idea*. Oxford: Oxford University Press.

Buzan, Barry. 2004. *From International to World Society?: English School Theory and the Social Structure of Globalisation*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dale, Gareth. 2010. *Karl Polanyi: The Limits of the Market*. Cambridge: Polity.

Davies, William. 2014. *The Limits of Neoliberalism: Authority, Sovereignty and the Logic of Competition*. London: Sage.

Gemici, Kurtuluş. 2007. "Karl Polanyi and the Antinomies of Embeddedness." *Socio-Economic Review* 6 (1): 5-33.

Hall, Peter A., and David Soskice, eds. 2001. *Varieties of Capitalism: The Institutional Foundations of Comparative Advantage*. Oxford: Oxford University Press.

Hann, Chris, and Keith Hart, eds. 2009. *Market and Society: The Great Transformation Today*. Cambridge: Cambridge University Press.

Harvey, Mark, Ronnie Ramlogan, and Sally Randles, eds. 2007. *Karl Polanyi: New Perspectives on the Place of the Economy in Society*. Manchester: Manchester University Press.

Konings, Martijn. 2016. "The Spirit of Austerity." *Journal of Cultural Economy* 9 (1): 86-100.

Krippner, Greta. 2001. "The Elusive Market: Embeddedness and the Paradigm of Economic Sociology." *Theory and Society* 30 (6): 775-810.

Krippner, Greta R., and Anthony S. Alvarez.

2007. "Embeddedness and the Intellectual Projects of Economic Sociology." *Annual Review of Sociology* 33: 219-40.

Mirowski, Philip. 2013. *Never Let a Serious Crisis Go to Waste: How Neoliberalism Survived the Financial Meltdown*. London: Verso.

Schmidt, Vivien A., and Mark Thatcher, eds. 2013. *Resilient Liberalism in Europe's Political Economy*. Cambridge: Cambridge University Press.

若森みどり『カール・ポランニー 市場社会・民主主義・人間の自由』NTT出版、2011年。

若森みどり『カール・ポランニーの経済学入門：ポスト新自由主義時代の思想』平凡社新書、2015年。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Hiroaki Ataka, *Unthinking the Westphalian Narrative: Towards a Plural Future of World Politics*, Proceedings of the Second Afrasian International Symposium, 査読有り、2巻、2013年、197-215

[学会発表](計4件)

安高啓朗・芝崎厚士・山下範久、ウェストファリア史観を脱構築する 言説・理論・歴史、日本国際政治学会 2014 年度研究大会、2014 年 11 月 14 日、福岡国際会議場(福岡県・福岡市)

安高啓朗・芝崎厚士・山下範久、ウェストファリア史観を脱構築する：試論的考察、世界政治研究会、2014 年 9 月 26 日、東京大学山上会館(東京都・文京区)

Hiroaki Ataka, *Non-Western IR, Civilisational Histories, and the Problem of Historical Narratives*, 2013 Millennium Annual Conference, 2013年10月20日、London School of Economics and Political Science ロンドン(イギリス)

Hiroaki Ataka, *Unthinking the Westphalian Narrative: Towards a Plural Future of World Politics*, The Second Afrasian International Symposium 'Multiculturalism in Asia', 2012 年 11 月 18 日、龍谷大学セミナーハウス「ともいき荘」(京都府・京都市)

[図書](計2件)

山下範久・芝崎厚士・安高啓朗編『ウェストファリア史観を脱構築する』、ナカニシヤ出版、2016年、印刷中。

安高啓朗・佐藤誠・大中真・池田丈佑編『英国学派の国際関係論』、日本経済評論社、2013年、278(112-129)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安高 啓朗 (ATAKA Hiroaki)

立命館大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：90611111